

2021/11/16

一九七八年二月八日（統治性の研究ほか）

M・フーコー『安全・領土・人口』

担当：K原

今回の講義：統治性（gouvernementalité）を研究する理由と統治の意味について

### 1) 統治性を研究する理由・国家と人口（pp.143-4）

これまで：軍や病院、学校、監獄に関する規律について研究してきた

これから：国家と人口の問題→統治性（gouvernementalité）という言葉を造語する必要性

### 2) 分析する視点の外への移動（pp.144-7）

これまで、軍や病院、学校、監獄に関する規律について研究してきた。

そこでは、三通りのやりかたで外に出ようとしてきた。

(a) 制度：「制度中心主義」から移動し、権力テクノロジーという包括的な視点を立てる

例) 精神病院

精神病院の内的構造などといった、それ自体の持つ機能についてを示すこともできる  
しかし、それらは結局包括的な企図において分節化されたものの一部に過ぎない  
→その個々の制度の背後に回り込んで、権力テクノロジー（=制度より大きなもの、  
生政治）を捉えることで、系統的つながりが見えてくる。発生論的分析ではなく、系  
譜学的分析が可能になる。

(b) 機能：機能という内部的視点の代わりに規律（戦略・戦術）という外部的な視点を立てる

例) 監獄

監獄に期待されている機能がどのようなものだったのかを分析することはできるし、  
それが現実どのように機能していたのかを調べることは可能。  
→しかし、監獄の歴史は監獄の機能上の欠陥さえも支えとするさまざまな戦略・戦術  
のなかに書き込まれている。重要なのは機能的視点から外に出て、規律という外部的  
な視点を立てること。

(c) 対象：できあいのものを対象とせず、その運動を捉える

例) 心的疾患・非行・セクシュアリティ

できあいのものそれ自体を対象にせず、動的なテクノロジーを通じて構成される運動  
を捉えることが問題

→対象それ自体を点として見るのではなく、その運動を捉えることが重要

### 3) 今年度の講義の論点 (pp.147-8)

国家に関しても、2)と同じやり方で国家の外に出ることはできるのだろうか？

- これまで取り上げてきた軍や病院、学校、監獄について、その内側からではなく、規律という概念により外の視点から分析してきたが、結局それはまた別の制度＝国家の水準に入ることになってしまうのではないか？
- 精神医学にとっての隔離技術、刑罰システムにとっての規律的技術、医学制度にとっての生政治のように、国家にとっての「統治性」というものを語るることができるか？

→「統治性」という概念を立てる

### 4) 「統治」概念の歴史 (13-15 世紀) (pp.148-52)

「統治」という言葉

- 13-15 世紀には、「統治」という言葉は実に幅広く用いられていた。
- 16-17 世紀に入ると、この単語が政治や国家に関わる意味を厳密に持つようになる。

13-15 世紀の「統治 (gouverner)」の意味

- 物質的・空間的な意味：空間における移動・運動、食料調達
- 道徳的・精神的な意味：一個人に対して確保する救済、指揮・命令の行使（不断の、熱心な、活発な、つねに善行を旨とする）
- 諸個人のあいだの関係の意味：自分や他者、他者の身体（や、魂や行動のしかた）に対して行使しうる支配
- 交流や循環的プロセスの意味：一個人から他者へと移行する交換プロセス

### 5) 「人間たちの」統治という考えかた (pp.152-5)

「統治」の意味を確認してわかったこと

- 13-15 世紀には、「統治」という言葉はとにかく幅広い意味で使われていた。
- 国家が統治されるということはないことがわかった。常に人や人の集団が、統治の対象となっている。
- この「人間たち」を統治するという考え方は、ギリシアにもローマにもない。  
例) ギリシア『オイディプス王』の王は、ポリス（領土）を統治していたのであって、人を直接統治していたわけではなかった。

→人間たちの統治という考え方は東方に求めるべき（東方：エジプト、アッシリア、メソポタミア、ヘブライ人など）

司牧的権力

王は実際に儀礼的な方法で人間たちの牧者であると表現されている。

- エジプト・アッシリア・バビロニアでは戴冠式の最中に牧者の徽章を受け取り、人間た

ちの牧者だと宣言される。(牧者は王の称号の一部)

- エジプトの頌歌(抒情詩)・アッシリア：神は人間の牧者である。そのため、王は神の下請け牧者ということになる。王は神と人間との関係に参与している。下請けが終われば人間たち(群れ)を神に返さなければならない。
- 司牧というテーマは、とくにヘブライ人において発展・強化された。  
→ヘブライ人にとって司牧的關係とは宗教的なタイプの関係であり、本質的に神と人間たちの関係である。司牧的権力とは、神が民に行使する権力である。これはギリシアの神とは相当に異なっている。

## 6) 司牧的権力の特徴 (pp.155-8)

(a) 移動する人の群れへ行使されること

- ギリシアの神の場合：基本的にはポリスにずっといて、自分の都市を護るために城壁の上にいる。領土への権力行使。
- 東方の神の場合：別から別の点へ移動・運動している群れに対して権力が行使される。牧者が羊の群れを連れて行くように、城壁を出たところに現れ、人間に道を示す。移動する神。動く群れへの権力行使。

(b) 群れの救済を目的とした、根本的に善行が旨の権力であること

- 司牧的権力は根本的に善行を旨とする権力である。
- ギリシアの場合：たしかに善行せねばならないという義務はあることにはあるが、しかしそれは権力を特徴づける他の特徴と並ぶ一つの構成要素に過ぎない。力が輝かしく映る。
- 東方の場合：司牧的権力はその全体が善行性によって定義づけられる。司牧的権力の目標は、群れの救済であり、牧者は群れを見守る者である。例) 羊の群れの食糧確保・牧者の気配り

→司牧的権力は力や優位の輝かしい顕示の形式をとらない。

(c) 個人化する権力であること 「全体にかつ個別に」

- 「全体にかつ個別に」→キリスト教的司牧における人口テクノロジーにおいて整備された、近代的技術の大問題へ
- 群れのために牧者が犠牲になる。一頭のために群れ全体が犠牲になる。→清書関連テキストで繰り返し現れるテーマ

## 7) キリスト教会による司牧の制度化 (pp.158-61)

- モーセ：はぐれた一頭の羊を救済しに行くために群れ全体を棄てることを受け入れる。羊をみつめて帰ると、自分が犠牲にすることを受け入れた群れも救済されていた。

→全体のために1つを犠牲にすること、1つのために全体を犠牲にすることが、キリスト教における司牧という問題設定の核心

- 司牧的権力の西洋世界への導入：キリスト教会を中継ぎにして行われた。制度として凝固させ、特有的・自律的な司牧的権力を現実組織し、ローマ帝国の内部にその装置を植え付けたのはキリスト教会だった。
- この文明は最も大きな暴力を繰り広げた文明の1つである。同時に、西洋の人間はギリシア人が認めようとしなかったこと、つまり、自分が羊たちのなかにいる一頭の羊だとみなすこと、自分のために我が身を犠牲にしてくれる牧者に救済を求めることを学んできた。
- この権力形式は、牧羊の側、牧羊とみなされた政治の側で誕生した。